

みこころ

第19号

2011年
8月15日

発行元:

カトリック城北橋教会 広報委員会

〒462-0847 名古屋市北区金城1-1-57

TEL(052)912-7123 FAX(052)935-2254

(HP)<http://johokubashi.mikokoro.net>



右はティツィアーノの作で、聖母被昇天は通常このようにマリアが万物の父なる神を見上げる姿で描かれます。驚きながら仰ぐ弟子たちを離れて、マリアはすでに荘厳な黄金の光りの中で、天上の歓喜の声に包まれています。左上はカスターニョ作で玉座に座ったまま合掌しながら天に上げられていく珍しい姿で描かれています。左はヴァン・ダイクの部分図です。輝く白衣のマリアは官能的とも思える表現ですが、霊だけでなく肉体をともなった復活を強調した表現です。(美術出版社・西洋絵画の主題物語を参照にしました。後藤)

INDEX 聖母被昇天号

「出会った人々に喜びをもたらす母マリア」 プリヨ・スサント神父 (p2)

「神学生日記」 片岡義博 (p3)

「イエスの聖心に最も近い時」 シスター林明恵 (p4)

「祈りを込めて」 シスター尾碕一美 (p5)

「テラー神父金祝・グラフ特集」 (p6~7)

「吉川さんを偲ぶ」 笹野芳夫・平川政美・清水隆 (p8~9)

「導かれたこの道」 岩本久美子 (p9) 「洗礼を受けて」 山田麻子 (p10)

「聖母被昇天の祝日にコルベ神父を想う」 清水綾子 (p12~13)

出会った人々に喜びを

もたらす母マリア

主任司祭 プリオ・スサント



聖母の被昇天の典礼の福音はいつもルカ一・三九一五六、マリアが親戚のエリサベトを訪問する場面である。この福音の最初の部分(三九一四五)特にエリサベトの挨拶の言葉をゆっくり味わいたいものである。

この福音の箇所は、実に興味深い。じっくり読むとぶに落ちないような細かいところがたくさんある。たとえば、「胎内の子は喜んで踊りました」というエリサベトの言は、大げさに聞こえる。また、なぜマリアはエリサベトを訪問するために「急いで」出かけなければならなかったのだろう。子を身こもって六ヶ月目のエリサベトを助けに、あ

るいは世話するために「急いだ」のだっただろうか。もしそうであったならば、なぜ三カ月後に、つまり、助けの一番必要な時期、出産の時に、自分の家に帰ったのだろう。そして、普通に親戚同士が久しぶりに会った会話ではなくて、なぜマリアとエリサベトが聖書文学的な言葉で会話を交わしたのだろうか。

エリサベトの挨拶を見てみよう。「あなたは女の中で祝福された方です」(一・四二)。

旧約聖書の中では二人の女性が同じ言葉で讃えられる。土師記五・二四には「ヤエル」という女性とユディト記一三・一八

には「ユディト」という女性が「あなたは地上のすべての女にまさっていと高き神に祝福された者」と讃えられた。なぜなら、女性でありながら彼らはそれぞれ、イスラエルの敵の大将を打ち負かせたからである。神は人間の的に「弱い」とよく思われた女性を通しても偉大なことを成し遂げることがおできになると旧約聖書は神の偉大さを啓示したのである。

同じ称賛の言葉、「あなたは女の中で祝福された方です」をマリアに適用することによって、ルカは神の偉大な救いのわざを「弱い」乙女であるマリアを通して実現されると教える。マリアを通して神のことが「肉」となったという偉大な救いのわざである。では、今のわたしたちの時代に誰が、どんな人が「祝福されている」と思われるのだろうか。

エリサベトは続けて言った。「わたしの主のお母様がわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう」(一・四三)。これも、旧約聖書から引用されていたのである。神が臨在すると思われる「神の箱」あるいは「契約の箱」が初めてエルサレムに運ばれた時、ダビ

デは叫んだ。「どうして主の箱をわたしのもとに迎えることができようか」(サムエル記下六・九)。ルカにとってマリアは「神の箱」のようなものだった。神の箱がエルサレムに着いた時、ダビデも人々も大いに喜んで、踊ったり、食べたりしてお祭りを捧げたのである。マリアの訪問も喜びをもたらさし、エリサベトの「胎内の子は喜んで踊りました」。ちなみに、「神の箱」、「契約の箱」は、三ヶ月間ユダの地に、あるいは、ユダの家に安置された。マリアもユダの町に、ザカリヤの家に三ヶ月間滞在したのである。つまり、ルカは、わたしたちがマリアを新しい「神の箱」として迎えるように招いたことがここで明確になったのである。神が人間として、「肉」として人間の歴史に介入されると決断された時から、神は女性の胎内を住まいとされたのである。マリアの子は主ご自身なのである。では、わたしたちキリスト者、そしてわたしたちのキリスト者共同体は、本当にマリアのように新しい「神の箱」、「契約の箱」、神の住まいとなっているのだろうか。人々に喜びをもたらしているのだろうか。

神学生日記

聖母マリアの信心 ヨハネ片岡 義博

今日八月十五日は、カトリック教会では聖母の被昇天をお祝います。ちょうどこの六月に日本のカトリック教会は、「聖母マリアへの祈り」から「アヴェ・マリアの祈り」へと、ラテン語である原文に、より忠実な翻訳にされた形で公での祈りが変わりました。

ご覧になられた皆様もいらっしやるかと思いますが、その祈りの移行に伴い、カトリック中央協議会では、今回の祈りの変更点についての解説文もあわせて紹介しています。ぜひ一読して頂き、普段なんとなく祈っているこの祈りについて、より深めて祈って頂けたらと思います。なぜそういうことを申し上げ

たかといえますと、四月に福岡の神学院に移り、福岡の教会、信徒の皆さんと交わりながら感じたことは、やはり名古屋や東京にはない、九州には独特な信仰深さがあると感じたことです。城北橋教会の皆さんの中にも、九州、長崎出身の方々が多くいらっしやいますので、その教会の雰囲気の違いなどを、昔味わった方もいらっしやるのではないかと思います。私もいま毎週末に司牧実習で教会に通いながら、その違いを身体と心で感じています。その感じたことのひとつとして、私たちの「聖母マリアの信心」ということがあります。

私の派遣されている新田原教会では、五月の聖母月に（十月のロザリオの月にもあるそうだが）、毎日夕方五時から教会の庭にあるルルドの聖母の御像の前でロザリオの祈りを行い、その集いに毎日老若男女問わず六十〜七十人の人たちが参加されています。教会学校の子供たちも、夏休みのラジオ体操の出席カードみたいな台紙が月初めに配布されて、参加してシスターからハンコを押してもらっています。

また、ミサの始まる前には毎回「お告げの祈り」が唱えられますし、教会だけではなく、多くの家庭で、家族そろって夜にお祈りをされたりするようです。多くの方が農家を営むその地で、都会とは違う決して裕福とは言えない、質素な生活の中にあっても、謙虚な心で、神のまなざしに映っている自分の姿で生きられていることを私は感じました。

それは、私たちの母であるマリア様も同じように、謙虚な心の持ち主だったからではないでしょうか。このことは、今日の聖母被昇天のルカの福音にも出てくるマグニフィカト（聖母賛歌）によく表れています。マリア様は、ご自分が神の母に選ばれたという事実を率直に認めながらも、それは一重に、神の恩寵（恵み）によるものだと言われました。「今から後、いつの世の人も、私を幸せなものと呼ぶでしょう、力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。」（ルカ一・四八 四九）

そういったことを黙想しながら「アヴェ・マリアの祈り」を深め、「聖母マリアの信心」の大切さを感じさせられました。神学校で生活をする中で、また皆さんも日常生活の中で、他人の評価に左右されたり、動揺

してしまうことがあると思えます。神のまなざしに映る自分の姿を高めていけるように、そしてありのままの自分を受け入れ、

謙虚に生きていけることができるように祈っていただけらと思っています。



新田原教会での聖体行列（キリストの聖体の祭日に）

イエスの聖心に 最も近い時(2) 聖心の聖母会 シスター・クララ 林 明恵

「三・一一」東北大地震から五ヶ月が経った。たくさんボランティアの一人として、私も約一週間参加した。

活動場所は南三陸町。未だに復興の兆しが見えない町の一つである。沿岸にそびえ立つ瓦礫の山、廃墟と化した志津川病院の一階層根にはまた船が乗っかっている。防災センターは鉄骨の骨組みだけ残っている。缶を足でつぶしたような車があちこちにまともて置かれたまま。

ペイサイドアリーナには、引き取られていない遺骨の箱と発見された当時の衣服がいくつも並べられ、発見されて真新しい遺体が棺に納められている。

この正面にはボランティアセンターがあり、個人あるいは団体のボランティアを受け付け、

その日の作業を割り振っている。主な内容は、瓦礫作業や清掃、写真洗浄と展示である。

少し車を走らせると、倉庫のような場所でコンビニエンスストアが店舗をもち、プレハブのようなところで、フィリピン人に対しての教育支援が行われていた。小高い丘に登ると志津川高校があり、避難所と仮設住宅があった。ここから、町全体が一望できる。瓦礫が所々にまためてあり、後は平地が広がる。被災者の方々には辛い眺めである。

毎日、住民と役場が復興のために話し合いをしているようではあるが、村や町が勝手に動き出せない事情があるらしい。高校にもボランティアセンターが設置され、全国からたくさんボランティアが集まっている。ここでの活動内容は、物資の仕分けやトイレなどの清掃、草取り、傾聴を目的とした喫茶店、芸能人などのチャリティーライブの会場づくりや清掃である。私は瓦礫作業に一日、そして喫茶店でのボランティアを志願した。

瓦礫作業は、志津川病院のカルテの積み出し、クリーンセンターへの搬送、病院内の清掃で

あった。ガラスと医療器具、海藻や貝殻などが入り混じった土を掃き出し、分別して土嚢に入れるのである。この病院はいずれ取り壊され、新しい場所で再建される。約七十名の患者さんが津波で流された病院の一階正面玄関には祭壇が設けられ、花やジュースが捧げられていた。

見知らぬ土地で人のいない廃墟での瓦礫作業の始めは、一抹の虚しさを覚える。ある長期ボランティアはこう語る。被災者の方々の顔は見えなくても、多くの無名のボランティアが自らの時間と労働を捧げ、廃墟となった場所をきれいにして被災者の方々にあ渡しするのだと。作業一日目の私はただただ言葉を失っていた。

場所を変え志津川高校のボランティアに入る。学校内の少し隠れた場所に「ケアカフェ」という看板で喫茶店が開かれていた。コーヒーを出しながら被災者の方々と一緒に座り、お話を聞いたりする。災害直後から志津川高校に入り、ボランティア活動を始めた通称「ハグ」さんは、時間の流れとともに変わっていく様々なニーズに添えてきた。

被災者の方々は、長期で活動する彼女に少しづつ心を許して

何処にあるのでしょうか？



「ご復活号の「お魚」、何処にあったか見つかりました？ 事務所での正解は？」

注意して見てください。今回はこのイエス様とマリア様の画像です。聖心の聖母のバシリカ(フランス・イスタン)にある像を模したものです。マリア様の左手がイエス様へと向かい、十字架上のイエス様の眼差しがマリア様に注がれています。ここまで昇華されたイエス様とマリア様の画像

リヨ神父様だけでしたが、入り口にある聖水台の下部にある飾りですので、

いったという。カフェを始めてから、人が集うようになり、常連客になる人もある。物質的や経済的、社会的なニーズだけでなく、精神的・霊的なニーズにも応えたいという思いが込められている。現在、避難所には約七十名の方々が暮らしている。

そんな中ちよつと席をはずして落ち着きたいという人のためにケアカフェのスペースが設けられている。お茶を飲みに来られる方々は、東北弁で世間話から始まる。しかし、災害の話になると自然に涙が出る。様々な

現実を前に、怒りや悔しき、悲しみがこみ上げる。私はまた言葉を失くし、ただただそこにいるしかなかった。やはり遠近様々な方法で寄り添い続けることの必要性をひしひしと感じた。ちょうどイエスの聖心が私にそうしてくれているように。

高校側は、早く通常の教育活動を再開したい。避難所の人々は、そう遠くない将来に住む場所を見つけて避難所から出ていかなければならないであろう。それに伴い現在の「ケアカフェ」も近々閉める事になるであろう。

祈りをこめて 援助修道会 シスター 尾碕一美

みこころ教会のみなさまへ
残暑お見舞い申し上げます。お元氣でお過ごしでしょうか？

先日、名古屋へ立ち寄った際、原稿募集というアナウンスを聞いて、手紙のかたちで私の「東日本大震災」を分かち合うことができればと思いついています。簡単な自己紹介を一言。私は城北橋教会で学生時代に洗礼を受けました。

その後、東京で幼児教育に携わり援助修道会に入会。今年修道生活・銀祝を迎える年になりました。一年に一度訪ねるみこころ教会は、なつかしい方々からの「お帰りなさい。お元氣ですか？」の響きは、イエスが人々を招いてくださったっていたもてなしの心と重なります。

今、わたしはさいたま教区で働いています。教区(埼玉・群馬・栃木・茨城県)について少し紹介いたします。信徒数約二十万人ですが、多国籍で数字に現れてこない信徒がたくさんいます。多国籍八一%、日本人一九%の割合で、堅信式をおこなうと殆んどがダブルの子供達です。協働宣教司牧という形で教区を十二ブロックにわけ、言語圏別の集まりや、子どもの信仰教育に司祭・シスターが協力して働いています。

ちょうど三月十一日の午前は、司教様を交えて教区事務所と司牧センターの職員全員で、教区内での危機管理体制と職員の緊急連絡網を会議の中で確認していたところでした。「十人のおとめ」のたとえ(マタイ二五・一)を思い出しました。

震災がおこりお互いの携帯電話は通じず、一番確実なのは公衆電話だとわかりました。さいたま教区は仙台教区と並んで被災教区です。

その後、直ぐに司教様は、茨城県の視察、そしてガソリン不足の中、みんなの車の中からガソリンを抜き集めて、新潟の菊地司教さんと一緒に仙台教区へ今後の支援の取り組み体制につ

いての話し合いに出発されました。

現在さいたま教区には、九名の神学生たちがいます。三月二十一日は、助祭叙階式・認定式があり四名の助祭が誕生しました。あくる日の二十二日に神学生たちは、司教命令で事務所に集合、被害のひどかった日立・鹿島・水戸教会の三グループに分かれ、現状調査をしながら瓦礫撤去などのボランティアに出かけました。

その後教区は、「さいたまサポートセンター」を設立、福島いわき市にある聖公会と協同で水・物資配布のボランティアを中心に、その後、仙台教区と協力・支援する中でいわき市湯本教会に「湯本サポートステーション」を設置、今まで毎週四名、五名ずつのボランティアを派遣しています。もちろん、現地のいわき・湯本教会の方々とともに、日々変化しているニーズに応えたいとの態度を大切にしています。

最初にふれましたが、さいたまは多国籍の信徒の多い地区です。この三ヶ月の間は、各教会・グループ、特にウェトナム、フィリピン、ブラジル・インドネシア人たちのグループが、いわき

市にある避難所を中心に「炊き出し」活動をしてきました。「ポートピアプル」として日本に来てお世話になったのだから、お返しです」。とさわやかにこたえます。

もう直ぐ震災から半年が経とうとしています。私は、これらの活動・取り組みについて振り返る中で、イエスのメッセージが今なお現代のわたしたちに投げかけている問いを受けながら、初期共同体の使徒たちが、数多くの証拠を持って人々に「福音」をはこんだ姿を思い浮かべています。

福島県は、震災・津波・原発事故と三重苦の現実を抱えました。人々は避難所から仮設住宅に移りつつありますが、そこでボランティアたちは何ができるかを日々問われています。『おはなしきき隊』というグループを作って傾聴を主に活動していますが、興味のある方は是非声をかけてください。いつでも



お待ちしています。距離が離れているので気軽にいらしてください。・とは言えませんが、長く書いてしまいました。最後まで読んでくださってありがとうございます。ごさいます。

祈りをこめて。
八月十日

福島県いわき市の湯本教会。ここにサポート・ステーションが設置され、ボランティアが働いています。

司祭叙階50周年 ございます

ブライアン・テラー神父様が七月一日に司祭叙階五十周年を迎えられました。主任司祭として長く赴任しておられる岐阜教会は別として、聖心布教会全体で、五月十四日(土)に記念ミサと祝賀会を城北橋教会で行ないました。
予算の都合で各教会十名までの参加としましたので、写真特集として当日の様子を報告します。



テラー神父様 おめでとう

ブライアン・テラー神父様は昭和三十六年七月一日に司祭の叙階を受けられ、五十周年を迎えられました。

叙階された翌年には、もう日本に生まれ、高山日本地区長が記念ミサの説教で触れられましたように、小学生と一緒に城北橋教会の近くにあり、また日本地区

長も歴任されました。また昭和四十三年には天使幼稚園を開園、現在も幼稚園の園長先生として働いておられます。



当日は厳肅な中にも、笑い声も出るような温かい雰囲気の中、ミサで、その後の祝賀会では、みこころコーラスの皆さんによる合唱、フィリッピンのお母さん方のダンス、日曜学校の子供たちのカスターネットなどを披露し、ホテル特製の美味しい料理を堪能しながら、テラー神父様に感謝の気持ちを伝えました。



四月二十七日、奥様をはじめご家族の手厚い看護を受けられながら、病魔と闘ってこられたフランシスコ・吉川義夫さんが八十歳の生涯を終えられました。何度も有難うの言葉を述べられながらの最期だったようですが、いつも笑顔を保ち、お人柄通り、全てを神様に委ねられた、まさに信仰一筋の一生でした。三人の方から追悼文をお寄せいただきました。



吉川さんの思い出

パウロ
笹野 芳夫

フランシスコ・吉川義夫さんが、天国へ旅立たれましたので、思い出話を少々綴ってみました。私が吉川さんと出会ったのは二十八年前になるかと思えます。お互いに長崎県の出身とあって

話が弾み、仕事の話となったとき、鉄骨の製作をなさっていると聞きました。そこで看板の枠を作って頂く事になりました。最初の仕事は納期の厳しいローソンでしたので、夜中まで製作をしていただき、今でも恐縮し、感謝をいたしております。

居酒屋では酔いが回るにつれカラオケとなり、十八番の「長崎の鐘」「白い花の咲くころ」など多くの得意曲を聞き、その美声を楽しんだことが夢のようです。本当に明るく楽しい方でした。晩年にはハーモニカで数多くの曲を楽しませていただきました。自宅近くの川を散歩される

ときは、沢山の子供がハーモニカを聞きに来て、何時の間にか子供たちから「ハーモニカのおじさん」と呼ばれるようになり、子供と一緒に楽しく遊んでおられたようです。私は、今こう思っています。天国へ行かれる途中には美しい花道が続き、吉川さんはハーモニカを吹きながら、その道を辿り、旅立っていかれたのだと。楽しい思い出を本当に有難うございました。

吉川義夫さんを偲ぶ

ヨゼフ
平川 政美

皆さん、吉川さんの作品が教会の中にあることを知っていますか。手先の器用な吉川さんは聖堂の中にある聖水盤や、大きな帆を張った竹製の帆船を作られ、その帆船は主任司祭室に飾られています。またバザーでも竹とんぼなど色々な作品を作り協力していただいております。吉川さんと言えば思い出すのが十八番の「長崎の鐘」です。

長崎の鐘よ、永遠に

アウグスチノ
清水 隆

高音のよく通る声で新年会などによく歌っておられましたね。また忘年会の二次会では、割り箸のタクトで皆を楽しませてくださいました。自慢の歌声がもう聞けなくなってしまう、本当に残念です。今も耳の奥で吉川さんの声が残っています。天国でもハーモニカを吹いたり、歌ったりして楽しんでおられますか。これからもずっと、いつもの笑顔で私たちを見守っていてください。ご冥福をお祈り致します。

吉川さんとは古い付き合いであつた。三年前、ペトロ岐部他の列福式に長崎出身の吉川さんから「一緒に行きましょう、泊まりは私の妹の家で」とお誘いを受けた。全くの幸運で二泊三日の感動の長崎の旅することが出来た。列福式、二十六聖人記念館、聖コルベ神父記念聖堂、大浦天主

堂、浦上天主堂、平和公園、永井隆博士記念館、平戸ザビエル記念聖堂、これらを次々に吉川さんの案内で訪問することが出来たのです。長崎は魚の産地でも有名で、夕食は新鮮な魚料理に二人とも酒は好きだし、大いに飲み、食べ、話に花が咲きました。また、二日間の旅で吉川さんの生涯をじっくりと聴くことが出来たのです。十五歳の時、長崎で被爆をされ、生死をさまよい、ここまでよくぞ生き延びた……。

永井隆博士も被爆をされ奥さんを亡くされました。奥さんの口ザリオが壊れることなく残った……。「長崎の鐘」の一番の歌詞です。召されて妻は天国へ別れてひとり旅立ちぬかたみに残る口ザリオの鎖に白きわが涙、慰めはげまし長崎のあゝ、長崎の鐘が鳴る（サトウハチロー作詞、古関裕而作曲、藤山一郎歌）この歌を同じ被爆者として吉川さんはよく歌った。美声でした。若い時は「歌手になつたら」とよく言われたと。カラオケへ行くと吉川さんの番には、皆が「待ってました」と声を掛けたものです。他にも特筆すべきは、手先が大変器用

で見事な工芸品を残されています。

病が進む中で介護される奥様は「よく祈りました」と。そして吉川さんは、いつも「ありがとう、ありがとう」と言ってくれたそうです。

良きご夫婦の最終章に感涙です。天国で「長崎の鐘」を歌う吉川さんを思い浮かべています。四月二十七日帰天、病名肺がん 享年八十歳でした。

導かれたこの道

マリア・クララ 岩本 久美子

高校生のとき、社会の授業で日本史と世界史を選択する機会があった。日本史は漢字が多そうだし、という安易な理由から世界史を選択。折しも、担任も世界史の先生だった。とても楽しいお話を交えて授業を進めてくださる先生で、世界史は好きな教科だった。なかでも私がとても興味を持ったのは、歴史上の有名な出来事とか、戦争だとか、そういうものではなく、ヨーロッパの建築様式についてだった。

流れる時代の中で様々な建築様式が存在した。その中で、なぜか分からないが、私がとても気に入ったのは、スペインで隆盛を極めたチエリゲラ様式。また、そのチエリゲラ様式の建築物の中で、実物をこの目で見てみたい！と強く思うまでに魅かれたのが、スペイン北部の地、サンティアゴ・デ・コンポステラにあるカテドラル（大聖堂）だった。この、サンティアゴの地は、カトリック巡礼の目的地として大変有名であった、というのはいふん後になって知った話だった。

高校卒業後の進路を決める時に考えたことは・・・サンティアゴのカテドラルをこの目で見るには行くしかない、それには、まずスペイン語を話せるようにならないと。

進んだ先は外大のスペイン語科。友人にも恵まれ様々な授業を受けているうちに、またしても出会ってしまった。チエリゲラ様式のサンティアゴ・デ・コンポステラのカテドラル。やはり行くしかない、と心に決め、卒業旅行で行ってみた。一人旅のはずが、当時大学生になっていた妹をなぜか連れての二人旅の卒業旅行。泊まることも決まらず、行き当たりばったりの貧乏

旅行。それでも、見たいもの好きになだけ見てから次の町へ移動しながら、サンティアゴ・デ・コンポステラへ向かった。サンティアゴの町に着いたその日、見つかった宿は、カテドラルまで徒歩五分の距離にあった小さな宿。部屋の窓からカテドラルの尖塔が見える位置にあった。

翌日、妹と連れ立ってカテドラルへ。着いてみると、なんだかすごい人だかり。ちようつどミサが始まった時間帯だったようだ。ポタフメイロという献香の儀式がガイドブックに載るほど有名なカテドラルなのだが、その日、運よく私たち姉妹はまさにそれを見ることが出来た。多くの人の中には、巡礼を経てこの地へ辿り着いた人も多数おり、その祈る姿はとても美しくかつたのを覚えている。

当時の私は、まだカトリックの信者ではなかったのだが、巡礼を経て祈りを捧げるその姿を、みんなが声をそろえて同じ祈りの言葉を捧げているのを、聖歌隊とともに歌うのを、漠然と羨ましく思った。素敵だなあ、と思った。

卒業旅行に行ったその年、数年一度というヤコブ年であったのも、あとから知った事実。ミサの時に、隣にいた地元のおばあさんらしき人が、しきりに

いい時に来た、とほめて下さったのをよく覚えていた。その時は、自分のスペイン語の能力的な問題もあつたので、なんてほめられるのが良く分からず、でも、なんだかすごいいい時に来たのだというのには分かった。

大学を卒業してから早十年以上。結婚してカトリックの信者となつた今、こうしてこの文を書きながら、ただただ驚いてい

る。なんとというたくさんのお恵みを頂いてきたのだろうと。それとともに、なんとというか・・・納得している。「なあんだ、こっうやって、こっういう風に、この場所に来るように、もつと前から導かれていたのか」と。

私の歩んできたこの道は、周囲のみなさんの暖かいまなざしを受けながら、今もこれからも、ずっと、続いていく。

六月五日（日）に今年もまた、みこころバザーが開催され多くの方に来場していただきました。値段付け、ケーキ作り、テントはり、会場の設



営など、女性部を中心に頑張っていたいただきました。また当日は売り場、駐車場案内、後片付けと、本当にご苦勞様でした。おかげ様で昨年より五万円ほど多い約六十三万の純利

みこころバザーの報告

益となりました。収益金の配分は七月十日の教会委員会で以下のように決定されました。

東日本大震災義援金として仙台教区とさいたま教区に夫々十五万円、中南米の若者たちの教育支援を行なっているオリブ・ジャパンに五万円、知的障害者授産施設のヨゼフ苑に二万円、炊き出し活動をしていきます福音館へ二万円、水道光熱費として教会に三万円、信徒会活動費として二十一万円。

なお、お楽しみ抽選会では、見事一等賞を木全和子さんが射止められました。おめでとございます。（後藤明憲）

洗礼を受けて

アンジェラ
山田 麻子

復活徹夜祭の日に洗礼を受けさせていただき、とても嬉しく思っています。教会に通うようになり五年が経ちました。

この五年の間に娘も産まれ、幼児洗礼をさすかり、健やかに成長しています。これも神様のお恵みだと思えます。

私が洗礼を受けたのは、毎日お世話になっている主人の父と母への感謝の気持ちと、私自身が洗礼を受けて、お恵みを授かりたいと思ったからです。

洗礼を受けてから、何かが自分の中で変わり、気持ちもものすごく楽になったような気がしました。それは神様に見守っていただいているおかげだと思います。

まだまだ何も分からない私ですが、どうぞ宜しくお願い致します。

過渡期にあるお葬式 その変化の様相

洗礼者ヨハネ
田口 保



せながら、そのきっかけなどをお伺いしてみました。
今年の成人の日に親類の娘さん

もつとロザリオの祈りに親しんで欲しい・・・という願いを込めて大宥さんがロザリオ作りをしておられますので、遅れば

んの最終誓願式（お告げのマリ
ア修道会）に出席されるため長
崎に行かれた折りに、久し振りに
中学・高校と通われた聖母の
騎士学園を
訪ねられま
した。

もつとロザリオに 親しんで欲しい

ミカエル 大宥 隆一さん

そこでロザリオの珠、十字架、セントターメダ

く想い出したそうです。そこで、
また手が覚えているかなとロザ
リオ作りを再開してみたところ、
結構出来るなあと自信が湧いた
との事。振り返ってみると、頑
強そのものだった身体がスポー
ツ事故で、働くこともままなら

ロザリオ作りの詳しい事は門
外漢です。質問のしようがあ
りませんが、ペンチで鎖を編む
なんて、そんな細かな職人技を
なさる大宥さんに感心するばか
りでした。最近のパウロ書店で
はアクセサリーのような豪華な
物が多いように
思われますが、大宥さん
のものは実用
的で堅牢その
ものです。ま
た一連だけの
携帯用ミニロザリオもあります
ので、売店では是非求め下さい。
壊れたものの修理もしていただ
けるそうですので、相談してく
ださい。単純で深い祈りである
ロザリオをもつと身近なものに
したいものですね。（後藤明憲）

イ・針金などの材料が置いてあるのを見て、神学生時代にロザリオを作っていたことを懐かし

うです。

を
選
ば
な
い
人
が
少
し
づ
つ
増
え
て
い
る。

「けばけばしい派手な葬儀ではなく、近親者を中心とした静かに送る家族葬を」「葬式は不要、火葬場への直葬を望む」「石の墓を作らず自然（＝海・山）に還りたい」。最近、このような声を実際の体験談などでよく耳にします。

変化が見られる。それは故人の遺言である場合もあれば、遺族の事情で選択されるケースもあり、いずれにしても、近年の生活スタイルの激変、あらゆる領域における世代間の意識の広がりや不況などさまざまな要因が重なりにある、伝統やしきたりが重んじられるはずの葬送の現場が変わらざるをえなくなっております。

また、核家族化の進展とともに地域共同体の崩壊状態の中、孤独死・自殺の増加とともに、心から死を悼んでくれる誰かが求められているのではないかと、思わざるを得ません。『心から人の死を悼む』ことができる人間が関わって初めて遺族・近親者が求める葬儀を施行することが可能なのではないかと考えざるを得ません。

僧侶や神官、牧師など宗教家にお金をかけない手作りのセラモニー、火葬場に宗教者を呼ぶだけの簡素な直葬が増えていることなど、葬式のあり方に大きな

葬式だけでなく、埋葬・埋骨方法についても、後々まで供養の必要な従来先の祖代々の石墓

葬儀が、故人の人生や生き方を

を遺族や関係者の心に残す場として、また、故人への真摯な別れと悼みを表現する場としてあるのなら、現行のように定形化は行われなし、均一化もされないはず。人の人生は、一人ひとり異なります。「死」の場面だけが定形化・定式化されることの方がおかしいといえましょう。葬儀にかかわるひとつの特徴が、「(その人)らしさ」の表現であり、それができるか否かによって、葬儀の形・質が変わってきます。「らしさ・らしい」の表現が可能となつたとき、つまり「個性化」が葬儀の世界で標準化されたとき、最期の別れの在り方は確実に変わるでしょう。その兆候もすでに見え始めているといえましょう。

遺族と葬儀に関わる者と教会が、一人の死を「共通の悼み」としてとらえ、その死の周辺に両者がトータルにかかわることができたとき、「その人らしい」葬儀は可能になると思われまふ。これまで葬儀は「死後の儀式」というとらえ方が主でしたが、人の一生は生・老・病という道程を経て、死を迎えることによつて葬儀に行きつくと考えなければならぬ。その意味で、「死期」に近い本人や、病人を抱える家族を対象に、「死の周辺の相談」を受けることも、関連性を深めることにつながるのではないのでしょうか。

死を前にしての相談は、死を待つというより、死と向き合つて生きるための最善の方法を、当事者や家族と一緒に考えるところなのだという出発点にしていきたい。

最近特に「家族葬」が増加しています。これまでの葬儀は、社会的、対外的な意識が強く見受けられました。葬儀は「家」が出すものであり、「家」が社会へ向けての力を示す場としてあつたのです。そのために多大な費用がかかつておりまふ。しかし、近ごろは、葬儀は社会的にも見直しされ始めており、故人を取り巻く親しい人たちだけのお別れを志向するようになってきておりまふ。家族葬は、遺族の経費節減にも直結します。ただし、家族葬を実現するためには、家族葬を受け入れる心構えと強い信念を持つていないと困難でありまふ。ここで考慮していただきたいのは、故人がキリスト教会の信徒であるならば当然所属教会の信徒と交わりを持つているはず。家族葬という形式にこだわらず、司祭・牧師・信徒にも葬儀の予定を知らせ、信徒も加わつた「ともに祈る」式で主の許へ送り帰す「家族葬」があつても良いのではないかと思ひを馳せらせておりまふ。

このようなことが生じてきたのは、現行の葬儀の在り方への批判や、宗教者(特に仏教)へのぬぐい難い不信感がある。葬送儀礼における、古い慣習、宗派や菩提寺にこだわらず、坊さんが必要としない方向への割り切りが開始されたように思ひまふ。その傾向が「家族葬」「直葬」の増加に表れているのではないのでしょうか。

葬儀を人任せにしないことが理想の最期につながっていく、と経験上そう思ひまふ。そのためには、生きているうちに自分の意思を明確にしておく必要がある。死を自分から離れた存在としてではなく、「死を免れることがない」という認識を常に持ち、死と向き合うことによつて、改めて生きている自分を見直すことが求められます。そして、その意思を実現するために、何が必要なのかを学び、準備することも必要となつてきます。

一人ひとりの人生は、その人の主体性に基つき、その人らしく生きることが出来る。そうであるならば、その人らしい別れも可能なはず。そこから、悲しくはあるが「いい葬儀だった」「故人の意思を尊重して見送ることが出来た」「その人らしい見送りが出来た」といった見送る側の納得と達成感が生まれる葬儀が可能になるでしょう。それができたとき、葬儀が持つひとつの重要な機能である悲しみを癒やすことが出来るのであると思ひまふ。納得や達成感はある「自由」さをもって行われたいと思ひまふ。葬儀社や教会は、これを支援する意識と役割を担つてこそ重要だと思ひまふ。



この号が発行される頃には完成していると思ひまふが、門から玄関までアスファルト舗装され、点字ブロックも埋め込まれたバリアフリーの為に工事が進んでいます。幼稚園やこどものが夏休み中の短い期間ですが、コンクリートに穴を空ける振動ドリルや土の締固めの大型ロー

段差を失くし、点字ブロックで安全に、玄関まで誘導されます



ラーなどの騒音で大変でした。今までは砂利が敷き詰められ、車椅子での出入りが自由でしたが、これで目の不自由な方も安心ですね。また玄関脇には障害者用の駐車場も用意されます。神に感謝。(後藤明憲)

聖母被昇天の祝日に コルベ神父を想う

ディンプナ
清水 綾子



四月中旬、まだ冷え込むポーランド。小雨が降る中、私はアウシュビッツ強制収容所の土をこの足で踏んだ。
第二次世界大戦中、ナチス・ドイツ軍のホロコーストの舞台

となったこの収容所の訪問は、私の長年の願いであった。人間が人間により、人間の権利を踏みにじられ、沢山の命が、まるで物のように「使い捨て」にされた場所。人類の負の遺産を、自分の目で見たいと、ずっと思っていた。その思いは、堅信名に聖マキシミリアノ・マリア・コルベ神父の名前を頂いてから更に強まり、ついに念願が叶ったのである。

コルベ神父をご存知だろうか？
一九八二年、ヨハネ・パウロ二世が、異例の早さで列聖されたカトリック司祭である。長崎に布教に來られ、聖母の騎士誌を発刊し、修道院も造られたの

で、日本人には割と馴染みが深い。しかし、彼が二十世紀の聖人として列聖されたのは、イエス・キリストが人類の罪を贖ったのと同じように、彼がアウシュビッツ強制収容所で、「身代わりの愛」を実践したことが一番の理由であろう。

一九四一年七月、アウシュビッツ強制収容所で一人の脱走者が出た。その見せしめに、十人の囚人が餓死刑に処せられることになった。所長のルドルフ・ヘスが、刑に処する囚人を無差別に

十人選ぶ。その中にフランシシェク・ガヨヴィニニエク氏がいた。彼は絶望の淵に立たされ、妻と子供のことを想い、大声で泣き叫ぶ。そこに、彼の身代わりを申し出たのが、コルベ神父である。申し出は聞き入れられ、コルベ神父は、他の九名と共に、地下の餓死監獄へと連行された。ここで注目すべきことは、コルベ神父はガヨヴィニニエク氏の事を全く知らなかったということだ。見ず知らずの他人の為に、自分の命を差し出したのである。

このことは、ガヨヴィニニエク氏一人だけを救ったのではなく、彼の家族、他の九名の死刑囚の心をも救い、更には、秩序や理性を失っていた多くの囚人



の心を救ったと言えるだろう。

水一滴与えられない真夏の餓死監獄で、神父は他の九名を励まし、支え、祈ることを教え、司祭としての召命を果たした。

無原罪の聖母に、絶対の信頼を置いていたコルベ神父は、聖母マリアへの祈りを一心に唱え、次々死んで逝く仲間達を看取ったのだ。二週間後、神父と三人の囚人が、まだ生きていた為、当局は、四人に死を早める薬を注射することにした。この時、コルベ神父は、他の三人を看取

り、最後に自分から進んで腕を差し出したと言う。生前、コルベ神父は、よく「聖母マリアの祝日に死にたい」と言っていたそうである。その願いを、聖母が聞き入れるかのように、一九四一年八月十四日、コルベ神父は帰天し、翌十五日、聖母被昇天の祝日に火葬された。コルベ神父は、心から信頼する聖母マリアに、その全生涯を捧げたのである。

私は、実際にコルベ神父が収容され、刑に処せられた餓死監獄に行った。そこに立った時、怖いとか、悲しいとか、そういう感情は全く無く、はつきり言え、何も考えられなかった。ただ、「信仰とは何なのか？」という、自分自身に対しての疑問だけが生まれた。今回、収容所の事を正しく知

りたくて、現在アウシユヴィツで唯一人の日本人ガイド、中谷剛（なかとたにたけし）さんに案内をお願いした。彼の案内を聞くうちに、私は自分がそれまで、カトリック信徒の側面からしか考えていなかったことに気付いた。ここに収容されていた多くの人はユダヤ人、つまり、ユダヤ教を信仰していたのだ。ユダヤ教徒にとって、コルベ神父は鬱陶しい存在であったであらうし、一説によると、コルベ神父自身にも、時に反ユダヤ教的見解があったとも言われている。しかし、コルベ神父は、ガヨヴィニチエク氏が何を信仰しているのか、知った上で身代わりを申し出たのではない（ガヨヴィニチエク氏はポーランド軍曹であり、おそらくカトリック信徒ではなかったと思われる）。もしガヨヴィニチエク氏がユダヤ教徒であったとしても、コルベ神父は「善きサマリヤ人」のごとく、迷わず身代わりを申し出たのではないだろうか。何故ならば、コルベ神父は、「愛の殉教者」だからだ。

た。今でもこの地は、ユダヤ教徒にとっては屈辱の地であり、また、彼らには先祖の墓であるという想いが強く、ユダヤ教徒達はダビデの星を掲げてやってくるそうだ。

その後、私は、ワルシャワへ戻る途中、コルベ神父が創った二エボカラヌフ修道院に寄り、当時、実際に神父が祈りを捧げていた御聖堂やその祭壇を見学したり、コルベ神父も訪れたことがあるというカトリック巡

礼地、チェンストホーヴァも訪れた。四旬節だったこともあり、二エボカラヌフもチェンストホーバも人が多く、特に、チェンストホーバのヤスナ・グラ寺院では、赦しの秘跡を受けるカトリック信徒で長蛇の列ができていた。

ダビデの星を掲げてアウシユヴィツを訪れるユダヤ教徒達、赦しの秘跡を受ける為に告解室の前に列をなすキリスト教徒達。どちらも、信仰する者の姿であ

り、その心は従順で、清く、美しいと思っただ。

しかし、信仰は、人間にとって心の支えであるがゆえに、時に争いの基となる。何を信仰するのか、また信仰を持つ持たないも自由である。自由であるからこそ、自分の信仰を大切に、他の信仰も尊重しなくてはならない。そして、信仰による差別があってはならない。私は今回の旅で、信仰の自由と平等、他宗教の尊重、を改めて考えさ

せられたような気がする。今年にはコルベ神父帰天七十年目にあたると。そのような節目の年に、コルベ神父を訪ねることができたことに感謝したい。これから先も、聖母被昇天の祝日を迎える度に、コルベ神父のことを想うであろう。想う度に、自分の信仰をより深め、他の信仰を尊重できる心を養っていきたいと思う。

神に感謝。

母の母の母に想ひ

五月八日はお母さんたち、六月十九日にはお父さん方とプリヨ神父様に祝福をしていただき



生まれ故郷を捨て、ルツは懸命に姑ナオミに尽くしました

愛と感謝をあらわす日ですから、日曜学校の子供たちから歌のプレゼントを受け、祝福をいただくだけではなく、自分も子供として老いた父母に感謝の気持ち

を伝えなくてはなりません。三月に悲惨な大震災を経験したとき、友人がしみじみと家族

の絆の大切さを話してくれました。ルツ記を思い出します。ナオミは夫も子供も失って、失意の中に故郷のベツレヘムに一人で帰ろうとします。そんな老いた義母を寡婦になったルツは見放すことは出来ず一緒にモアブから着いて行きます。そしてルツは一生懸命に落穂拾いをして、



独な生活は必ず訪れますが、ナオミのように葡萄の枝に繋がってれば、その苦しみは必ず喜びに変えられると思います。天におられるお父さんとお母さんに感謝の祈りを捧げましょう。

(後藤明憲)

マリア祭に 神輿が登場 5月8日

五月は聖母月としてマリア様に捧げられます。美しい薔薇の花が咲くこの季節にマリア様を崇敬するのは素晴らしい信心です。城北橋教会でも、献金



ア様の神輿が登場しますが、今年から城北橋教会にもルルドの聖母が乗った神輿が出来るようになりました。聖心の聖母とルルドの聖母が向き合っ

をしてマリア様にお花を捧げ口ザリオの祈りをしてきました。シチリアを舞台にしたマスカリーニの歌劇「カヴァレリア・ルステイカーナ」で復活祭の行列にマリア

に、今も、死を迎える時ものつて下さい。アーメン。(後藤)

場面もありましたが、皆で心を合わせてマリア様にお祈りをするのであります。また五月三十一日は聖母が親戚のエリザベトを訪問した事をお祝いします。アヴェ・マリア、恵みに満ちた方、主はあなたとともにおられます。あなたは女のうちに祝福され、ご胎内の御子イエスも祝福されています。神の母聖マリア、罪深いわたしたちのために、



葬儀問答シリーズ 田口保

問) カトリック信者です。死後お墓は必要ですか？

答) 旧約聖書創世記を開いてみましょう。23章がアブラハムとともに生活をしたつれ合い(=妻)サラの死と埋葬が記されています。ここでは、アブラハムが代価を用意しカナンに墓地を購入し妻サラを葬ったと記されています。また創世記25章7節~は、アブラハムの死と埋葬のことが記されています。創35:19では、ラケルは死んで、エフラタ、すなわち今日のベツレヘムへ向かう道の傍らに葬られた。創35:20に、ヤコブは、彼女の葬られた所に記念碑を立てた。それは、ラケルの葬りの碑として今でも残っている。とあるように碑(=墓石)が建てられています。創40章20節~50章はヤコブおよびヨセフの死と死体への防腐処置を含めて一族の墓地へ丁寧に埋葬されたことが詳細に記されています。

新約聖書ではイエスの死と葬りは前記問(6)で触れていますが、墓に埋葬されたと記されています。

逆に、葬られなかった人を聖書はどう記しているのでしょうか。

もしあなたの神、主の御声に聞き従わず、今日わたしが命じるすべての戒めと掟を忠実に守らないならば、これらの呪いはことごとくあなたに臨み、実現するであろう(申28:15)。あなたの死体は、すべての空の鳥、地の獣の餌食となり、それを齧り追ひ払う者もない(申28:26)。ヤロブアムに属する者は、町で死ねば犬に食われ、野で死ねば空の鳥の餌食になる。まことに主はこう告げられた(列王14:11)。パシャに属する者は、町で死ねば犬に食われ、野で死ねば空の鳥の餌食になる(列王16:4)。「あの呪われた女の面倒を見てやれ。彼女も王女だったのだから、葬ってやれ。」だが、人々が葬ろうとして行くと、頭蓋骨と両足、両手首しかなかった(列王9:34,35)。犬がイズレエルの所有地でイゼベルを食い、彼女を葬る者はいない(列王9:10)。この申命記および列王記、をみると、神ののろいとその結末と言える箇所ですが、本当にむごいものですね。ということで、すべての死者が墓に葬られたわけでもありません。聖書に出てくる墓地はどちらかと言えば、個人所有の私有墓地を示しております。時代にもよりますが、多くの人々は、共同の埋葬墓地に埋葬されていることがほとんどです。死の現象やどのような形で埋葬されたかを詳しく知るには、フィリップ・アリエス著「図説 死の文化史」日本エディタースクール出版部 1990年版を参照して下さい。ほかに彼の著書では、「死と歴史」みすず書房1983年、「死を前にした人間」1990年版を参照されると面白いですよ。どうも、答となっているのか否かに陥りつつありますが、キリスト教では「人は土に返る」ことから土葬を重んじてきました。

昨今、環境問題・衛生面からキリスト教国でも「火葬」は緩やかに増加しております。火葬にするか従来の土葬にするかは、故人ならびに遺族が選択するようになっております。日本では法律で「火葬」を前提としております。

ただ近頃、葬儀後の葬り方(=埋葬方法)に変化が見受けられるようになってきており、海上への散骨をはじめ、納骨堂への納骨などがあり、必ずしも墓地でなければという意識変化が見受けられます。自分が納得できる形式がよいのでは。

答になっているのかなあ・・・。

一粒会の集い に参加して

6月26日
大垣教会にて



東海地区「一粒会の集い」が六月二十六日(日)大垣教会で開催されました。担当委員の清水さんの案内で岩崎さんご夫妻と一緒したのですが、城北橋教会からは前の担当委員だった松村さんをはじめ多数の方が参加しておられ、熱心に神学生

のために祈りを捧げておられました。

大垣教会のレイナルド・ティボン神父様が、開会の挨拶で、久し振りにフィリピンに帰国され、神学校を訪問された時の事を話されました。「私が学んでいた時は四十名の学生がいましたが、今はたったの五名でした。どうか司祭の召命と養成のために、祈ってください」ということでした。ヨーロッパやオーストラリアではなく、フィリピンでも神学生の数が減っていることを聞き、びっくりしました。講演は膳棚教会の狩浦正義神様で、第二ヴァチカン公会議



復活祭にはこんなに多くの侍者がいました。召し出しがありますように。

による混乱、世相は闘争の時代という中で司祭養成だったので、ミノルタの正社員となり優秀なサラリーマンになってしまっ

た。しかし、お母さんが夢の中
に泣いておられ、大神学校に戻ったという体験を語られました。召し出しって、こんな単純なことですよと笑って言われたのですが、長崎・五島のご出身ですので、やはり信仰が生活の基礎となっておられたからでしょう。名古屋には長崎から若い人が働きに来ているから、名古屋で彼らの世話をしたいという希望を相馬司教様に話され、東山教会の助任司祭で司牧生活のスタートをされました。

その後、カナダに留学、解放の神学を学ばれましたが、ベトナム戦争、南アフリカのapartheid(アパルトヘイト)による弾圧などで、カナダでも難民問題に直面されました。解放の神学ではなく、神学からの解放でしたと笑って言われました。ですから、帰国後



六月二十
した。

しまいました。

六日、キリ 梅雨明け前の暑い日で
ストの聖体 したので、祝福を受けら
を祝う祭日 れる川原さんの背広が汗
に、ヨゼフ で大きく滲んでいました。
川原収蔵さ やや失礼で不適切ではあ
るが、

ヨゼフ川原収蔵さん アガタ川原フジエさん 金婚式おめでとうございます

ん、アガタ りますが、家族のため、
川原フジエ 他人のために、地道な労
さんご夫妻 苦を重ねてこられた方へ
が、めでた 感謝をするという意味の
く金婚式を 「汗馬の労をねぎらう」
迎えられる という言葉を思い出して



(後藤明憲)

のこ家族・親族に囲まれ、
満面の笑みで教皇様から
のメッセージを大事に抱
えておられた川原さんご
夫妻、おめでとうござい
ました。キリストの聖体
の秘跡によって、さらに
お二人に豊かなお恵みが与
えられますように。

信者動向

【受洗】

四月二十三日

アンジェラ 山田 麻子



【初聖体】

六月二十六日

ヨセフ 宮地 翼
ヨゼフ 大竹 克典



七月三日

アゲネス 大浦 由衣



【転入】

四月十日

仙台教区 会津若松教会から
成田 友子(ともこ)

【帰天】

四月二十七日

フランシスコ 吉川 義夫
(八十歳)

六月二十九日

ミカエル 河崎 大亮
(六十八歳)

七月十二日

ミカエル 大宍 幸一
(七十八歳)

編集後記

援助修道女会のシスター尾崎が七月三十一日に城北橋教会のごミサに預けられたのを機会に無理やり寄稿をお願いしました。

ご多忙のところ本当に有難うございました。

またシスター林が震災地でボランティア活動をされて来られたので、日曜学校のサマーキャンプでお疲れのところ、ご無理を申し上げました。毎週、被災者のための祈りをしています。体験されましたお二人の報告を読みますと、自分の問題として迫ってきます。何も出来ないけれど、話を聞いてあげるという事も大切なのだなあと思いましたが、一粒会の集いにおける狩浦神父様の講演要旨を掲載しましたので、この問題と関連して、読んでいただきたいと思えます。

そのほかに岩本久美子さんが、建築家チエリゲラー族による様に触られています。サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂のファサード(入り口のある建

物正面)はチエリゲラー族によって十八世紀初頭にスペイン・バロック調に装飾されており、重厚な外観を呈していますが、建物本体は十世紀にイスラム教徒に破壊され、十一世紀から十二世紀にかけてロマネスク様式で再建されたものです。この時期にフランスでゴシック建築が生じます。ああ、行きたい。(後藤明憲)

サマーキャンプ 八月四・五日



日曜学校のサマーキャンプが八月四日から一泊二日で開催され、子供たちにとつて、夏休みの楽しい思い出となりました。初日は十時に教会を出発、江南教会では牧野神父様が出迎えてくださり、ごミサにあずかりました。昼からは工場見学を止め、小牧のプールで遊び、夕方から楽しいパーベキューと花火で遊びました。二日目は八時に出発、奥三河・新城市にある鳴沢苑で鱒の掴み取りをし、パーベキューで楽しみました。冷たい清流の中で魚を追いかける子供たちは

大騒ぎでした。両日とも晴天に恵まれ本当に良かったのですが、猛暑の中、マイクロボスの運転などプリヨ神父様ありがとうございました。シスターはじめ、日曜学校の先生、そして子供たちの先輩である中学生六人、本当にご苦労様でした。またお疲れ様でした。(後藤明憲)

